Saga Women's Junior College

佐女短研究紀要　第40集：31—38，2006

中国と日本における〝数字〟文化の比較
——諺と慣用句を中心に——

湯　　艶

A Comparison of 'Numbers' in Chinese and Japanese Cultures
—proverbs and idioms—

Tang Yan

1　はじめに

日本語にしても中国語にしても，数字を含むことわざや慣用句はどこにも見られるが，それは，そこに両国ともに独自の数字文化が内在しているからだろう。とするならば，両国の数字にまつわる文化の相違点や共通点を探ることで，両国が〝数字〟に見出してきた意義や価値，さらに伝承や宗教へと続く古人たちの意識をもしかしたら知ることができるかもしれない。

もちろん，国によって数字についての意識や取り組み方はずいぶん異なるだろうが，本稿では中国と日本の両国でよく用いられる数字を含む慣用句やことわざを対照させることで，中国日本の数字文化の特徴を垣間見ることができるのではないかと考えている。

2　日本の数字文化について

まず，「三日坊主」という語を取り上げてみよう。「あの人は何をやっても三日坊主だ」というセンテンスをよく耳にする。そしてこのセンテンスは多分誰にも理解できる。それは「長続きしない人」，「飽きっぽくて，やり始めてもすぐに止めてしまう人」のことである。では，日本人はなぜこのような人を「二日坊主」，あるいは「四日坊主」といわないのか。

もうひとつ例を見てみよう。日本の歴史の中で，明智光秀という武将がいた。「三日天下」とは，明智光秀について言われているのは周知のとおりである。しかし，歴史上の光秀の政権は短かったけれども，文字通りの「三日間の天下」ではなかった。なぜ日本人はそれを知った上で，あえて「三日天下」と言うのだろうか。

この二つの例からみて，この「三日」という特殊な数が，単なる数詞だけではなく，時間の短さを象徴させているのだといえる。同じような例に，「三日見ぬ間に桜」，「犬は三日飼えば，三年その恩を忘れない」，「猫は三年飼っても三日でその恩を忘れる」などがある。

そして日本人は，「三」という数字だけでなく，「五」と「七」という数字についても愛着があ

NII-Electronic Library Service

Saga Women's Junior College

るようだ。

次に「五里夢中」という言葉を取り上げてみたい。この諺は，たとえば身近にある『新明解国語辞典』[1]（金田一京助他編，三省堂）を見れば，そこでは次のように説明している。

《五里霧中　五里四方に立ち込める深い霧の中では方角がわからなくなることから，どうしたらいいのか判断に迷い，見込みがまったく立たないこと。》

とある。なぜここで「五里」「霧中」であって，「四方」「霧中」とならなかったのかといえば，『後漢書－張楷伝』に「性好道術能作五里霧中時関西人裴優，亦能作三里作」とあるように，そもそもは中国の『後漢書』にある物語がその起源となっていて，それを日本人が古くそのまま言い伝えたことによる。

しかしながら，面白いことに中国ではこのような意味の場合は「糊里糊涂」といって，日本人が好む「五里霧中」のような言い方はしない。すでに中国人が用いていない故事成語を，日本人はいってみれば日本文化化させて使用しているということができよう。

また，いわゆる「五十歩百歩」（五十歩をもって百歩を笑う）というものがある。そもそも，この「五十歩百歩」にしてもまた，中国の『梁恵王上』（孟子）にある「或百歩而後止，或五十歩而後止。以五十歩笑百歩，則何如」を踏まえた故事成語であるわけだが，「五里霧中」と同じように，これもまた現在の中国では用いることはない。この場合，中国では「半斤八?(両)」といい，「似たり寄ったり」の意味として用いている。

このように，起源は中国の故事によるものでありながらも，日本では日本文化として組み込まれ，しかも本国の中国では現代から排除させられた名数があるということが面白い。

周平著『日本風情録』[2]によると，日本の静岡県の山奥で，よく用いられるある諺があるということだ。それは「七つ鹿三つ熊」である。この諺の意味は，七歳の鹿と三歳の熊を撃つと魔が差すということである。この場合は，三と七との結びつきである。三と七には何か特別な関係があるのではないかと思わず連想してしまう。もちろん，この諺に近い三と七とを組み合わせたもの，たとえば「七本槍三振太刀」などのような諺など少なくない[3]。

以上，一般的に日本人が好む傾向にある「三」「五」「七」の奇数字についてそれぞれ考えてみた。そして，たとえば宮腰賢編『現代に生きる故事諺辞典』[4]にある故事ことわざのなかから数字を用いたものだけを抽出してその占有率を計算してみると，「三」を用いたものは約40％を占め，「五」「七」を用いたものはそれぞれ11％と32％となった[5]。なお，「八」についても，名数として使用される割合は高率であるが，これについては後に考えてみたい。

そして日本の「三」「五」「七」を用いた故事ことわざの内容を誤解を恐れず単純化していえば，「三」を中心とするものは教訓として後代の人を戒める場合によく使われていて，「五」と「七」を中心とするものは，各分野の知識を伝える場合によく用いられる傾向にあるようだ。

では，日本人の数字文化の特徴をもっと探るために，次に日本の名数と祭日の期日などを見てみたい。

NII-Electronic Library Service

Saga Women's Junior College

3　日本の名数と祭日の期日

面白いのは，たとえば前掲書『新明解国語辞典』の「名数」の項目を見ると，「何らかの意味で並べられる，同類の優れた幾つかのものを三，五，七などの数をつけてまとめて言う，一定の呼び方」とあることだ。この「名数」の説明として執筆者に挙げられている具体的数字が「三」「五」「七」であるのは興味深い。ここで「二」や「四」「六」といった偶数字が援用されていないのは，単純に考えてやはり日本人が奇数字とくに「三」「五」「七」を好んでいることをこの例から窺うことができはしないだろうか。

また池田弥三郎著『言葉の中の暮らし』(6)によると，日本の名数には歴史的意識を背景にしたものや，仏教，儒学あるいは有職故実などからさまざまな語が用いられているとある。それらは『名数一覧』という本に整理されているが，この『一覧』を一見すると，やはり圧倒的に「三」の名数が多く実に百十五語で，「五」の名数が四十八語，「七」の名数が三十七である。

これに対して，「一」の名数は十一語で，「四」の名数がたった十三語しかなく，「九」が二十一語だけだ。この『名数一覧』にはさまざまな数字を含んだ名数があって，一見して日本の数字文化の特徴を著しているといえる。

具体的な例をあげてみよう。たとえば「三」を利用したものには「日本三景」（宮城県の松島，広島県の厳島，京都府の空の橋立）とか，明治維新の「三傑」（西郷隆昌，大久保利通，木戸孝允）などがあり，また日本の「三才女」（藤原道網の母，和泉式部の女，赤染衛門）や日本の有名な「三大急流」（球磨川，富士川，最上川）がある。そして「七」には「七福神」「七不思議」，地方でよく用いられる「七賢人」といった言い方などがあって，数え上げればきりが無いほどだ。

上の名数が日本の数字文化の特徴を反映しているのはもとより，祭日の期日などにも現れている。周知のように日本では一年の主な年中行事のなかに「三」「五」「七」を含む節供があるのでそれを見てみたい。

①三月三日　女の子の将来の幸福を願うひな祭りである。三月は上巳（最初の巳の日）に紙や植物で作った人形（形代）で身体を撫でて汚れを祓い，それを水に流して神送りする行事があった。こうした人形遊びと呪術用具としての雛人形の信仰とが互いに融けあい，次第に雛人形への骨格を形成したとされる。江戸時代に入り，太平の世相を迎えて三月の節供が盛んになると，雛遊びが一般化して雛祭りに移行し，年中行事として三月三日に定着したようだ。

②五月五日　端午の節句は，中国および朝鮮，日本などで五月五日に行われる年中行事である。端午は初五の意，五月初めの午の日である。五月は旧暦では午月に当たり，陽数つまり奇数の月日同数を重んじて節供の時にし，三節供，五節供などと称したように，五月五日を節日とした。中国では端陽節といい，古来旧暦五月は雨季に入り悪疫がはびこるため厄除けをしなければならない月とされていたため，この日に薬草を摘み，門に菖蒲を挿したり，粽を食べ，雄黄

NII-Electronic Library Service

Saga Women's Junior College

酒という薬酒を飲んで災厄を祓ったりしたという。

③七月七日　七夕は織女際，星祭などともいい，中国伝来の行事と日本古来の伝承，さらには盆行事の一環としての行事など，さまざまな要素が入り混じって今日に伝承されたものである。中国伝来の乞巧奠は当初貴族に伝わり，それはこの日晴天を祈る星祭となった。一方，日本古来の農神としての七夕は民間に流布し盆行事とも結合して穢を祓う習俗となった。日本の七夕は中日二つの複合習俗といえよう。

④七五三　十一月十五日に行われる，子供の成長を祝う風俗である。七五三の祝いをなぜ十一月十五日にするかといえば，十一月は農作業が終わって霜月祭りを行う月にあたり，十五日は多くの祝祭日のある満月の日であるため，この日が子供の成長を氏神に祈願する日として選ばれたと思われる。

以上のように，日本人は古代の中国文化と日本古来の文化を融合させながら，現代に至るまでその習慣を大切に育てている。そうした民間習俗にとくに「三」をはじめとする奇数字があることは，中国人の私にとって興味深いことである。

たとえば上野富美夫の『数の話題辞典』によると，瑞祥の架空の動物の龍の爪を三本と決めてあったため，「三」は調和・安定の数と言われるようになったと考えられているそうだ。人間の形は，胴を中心として頭と両手両足という五つの方向に部分が伸びて全体となり，また頭部では両目両耳と口を合わせて五となる。さらに両手両足にはそれぞれ五本の指があるところなどから，五は人間や完成された存在の象徴として考えられている，ともある。

そして「七」については，もともと奇跡，幸運，神秘などを表す数として，日本で認められていたということだ。また，日本人は「四」と「九」を嫌うのはいうまでもなく「四」の音は「シ」であり，そこから「死」を連想するからであって，「九」は「ク」でこれまた「苦」を連想するからである。ちなみにいえば，韓国でも「四」は「サー」と読んで「死」（サー）となるためホテルや病院では縁起の悪い数字として用いない。

4　中国の数字文化について

中国人の数字に関する意識の源は遠く，流れは長いと言ってもいい。中国の古代には「黄帝四面」，「方相四目」のような伝説と民間風俗がある。「四」という数字によって神秘的な文化のインフォメーションを伝えることもあれば，「八卦」などで将来の吉凶を占うこともある。また，漢族といくつかの少数民族の人たちは「九」に崇敬の念を表す風俗もある。このように，歴史的あるいは中国人の心理構造からみて，数字文化は中国の伝統文化にも重要な役割を果たしている。

では次に，中国の数字の特質を十分に表現している慣用句と民間風俗を見てみよう。

大志を抱く人には「四方之志」という慣用句がよく使われる。すべてをきちんと片付けられる

NII-Electronic Library Service

Saga Women's Junior College

ということを表わしたいとき，「四亭八当」という慣用句もよく使われる。また「四面八方」「四世同堂」などもある。あたかも中国人は「四」という数字を偏愛しているかのようだ。

中国人は古代から〝いずこにも四がある〟という世界観を持っている。たとえば，われわれの踏む大地は四角い形で，古代中国（実は今の中国の広さより狭い地域）の周辺は「四荒之国」である。日常使用する漢字の祖形は四角形であり，住居は「四合院」と名づけられる。使用する紙や墨，筆や硯は「文房四宝」と呼ばれ，新年の挨拶には「四季発財」という言葉がある。もし，故郷を離れて遠いところへ行き，一生を送ったら「四海為家」という考えを持っておかなければならない。中国人はまさに「四」という数字に特殊な思想を潜ませていると言えよう。

また，中国では古代から「九」という数字をめでたい数字と見なしていた。階級と貧富を問わず，上は権力を握る皇帝から下は民衆にいたるまで，みなこの数字を無意識に偏愛している。今まで皇帝は「九鼎」ということを誇っていた。漁民たちが仕事するとき，「九十九のカーブ」というような歌詞を思わず歌いだす。それに，古代から中国の国土は「九州」と名づけられている。これらは，中国の数字文化の裏に潜んでいる中国人の信仰と世界観を反映するものだといっていいだろう。つまり，「九」という数字を神聖なシンボルだと見なしている信仰のことである。

「九」を含む慣用句を少し見てみると，「どんなに大きな事業でも，小さな仕事からしなければならない」という意味を現わしたいとき，中国では「九層之台，起于累土」という慣用句がよく使われる。また，「国の隆昌のこと」を喩えるとき，「九年之蓄」という慣用句もある。これらのほかに，「九旋之渊」（智謀を持っている人の喩え）などがある。これら慣用句から見ると中国人はどれほど「九」という数字を好み，またそこに特殊な意義を見出しているかが分かる。

「九」が中国の数字文化にどれほどの地位を占めているのかをさらに考えてみるため，中国の民間の風俗を紹介したい。中国では旧暦の九月九日の日を「重陽節」と呼ぶ。この日になると中国人は「茱萸」という植物を身につけたり，菊で作った酒を飲んだり，そそり立つ山などに登って遊んだりする。

ではなぜ中国人は重陽節を「九月九日」に定めたのか。中国の古典『周易』によると，「九」は陽数であるから二つの「九」という数字を重ねると，発音も漢字形にしても中国の「久久」という言葉と一致するので，「九九」は「長く続く」や「長寿」という意味になり，「九月九日」の日を重陽節に定めることになったという。中国では，毎年重陽節になると，故郷を離れた人たちは家族や親友，恋人のことをもっとも懐しむのである。

次に，中国の数字文化の一般特徴を表現する風俗と伝説などを見てみよう。

古来，中国人は偶数に特別な意義を見出している。漢族には神を信仰する「和合」というものがあって，「和合」とは中国の古代神話では，互いに愛を認め合う二神の謂である。民間の結婚披露宴ではこの二神像がしばしば陳列されたりしたものである。すなわち，相手の神にもう一方の神が蓮の花を捧げ，（蓮の花は中国で「荷花」と読み，「荷」の発音は「和」と同じ）もう一人の神が丸い箱を抱く（箱は中国語で「盒」と読み，「盒」の発音は「合」と同じ）のである。

もちろん，普通の民間生活の場合だけでなく，中国の哲学にも調和の意識が見られる。中国の『呂氏春秋有史覧』には「天　陽也，地　陰也」という言葉があるが，この古い言葉も「陰と陽と

NII-Electronic Library Service

Saga Women's Junior College

は対立の状態を和合の状態に変えて，調和をはかりたい」という意味を表していると考えられる。実のところ，中国では偶数は調和のシンボルのみならず，喜びや幸福などのシンボルとも見なしている。

なかでも次に見る「六」は，上のような意味でのシンボルマークのひとつだといってもいい。たとえば，古代の中国の貴族地域でかなり広く行われているフェスティバルの一つは「六月六日祭り」と呼ばれているが，これは村の人たちが牛豚を殺して，山などの自然の神を祭る儀式を行うのだ。そうして家族の安全や収穫の豊穣，太平無事などを祈るのである。

5　中日数字文化の特徴の比較

前節までは日本の数字文化と中国の数字文化の特徴について紹介してきたが，ここで両者の相違点を簡単にまとめてみたい。

日本では「三」「五」「七」といった三つの奇数をめでたい数とする一方で，「四」は「死」にあたるため，また「九」は「苦」にあたるためにこれを避ける傾向にある。これにたいして，中国ではだいたい「偶数」をめでたい数字と考えている。しかも，中国人は日本人が嫌って避けがちな「四」と「九」についても，プラス方向の発想を抱いている。これからは中国と日本の数字文化の特徴の相違性が，両国民の深層における文化意識の相違性を証す典型的な例だといっていいかもしれない。

とはいえ，両国には共通して好む数字があるのでそれについて考えて見たい。日本の神話では，自分の国を「大八島国」と名づけている。また，日本の国道にも「八道」という言い方がある。それは東海道，東山道，北陸道，北海道，山陰道，山陽道，南海道，西海道である。日本人は主な姓を「八姓」にまとめる。日本人の自然崇拝の考えでは，天にいる諸神を八百万の神と呼んだ。『古事記』にも「八」を含む物事をところどころに見ることができる。

では，「八」という数がなぜ日本の数字文化にそれほどまでに影響を与えているのか。日本人にしてみれば，「八」にある一画と二画の撥ねが，二つの道のように止めども無く伸びているからである。日本でいう，いわゆる「末広がり」で，人の将来の成功を象徴するかのようだ。

中国も日本と同じように古くから「八」を偏愛している。なぜならば，中国人は「八卦」という考えの影響を受けているからである。中国では，「八卦」とは古くから宇宙の多種多様な属性を代表するものだとの考えがある。だからこそ，中国の伝統文化には「八」を用いた名称がどこでも見られる。揚雄の書いた『甘泉賦』には八神のリストなどが掲げられてある。

また，中国の三国時代に諸葛孔明という人は，己が百戦百勝するために「八陣図」を使った。また，中国の古代の楽器には，「八音」という言い方があった。この「八音」は具体的に言うと，「金，石，竹，匏，土，革，木」の八種類の材料で作った楽器である。もちろん，中国の民間では「八宝飯」，「八宝羹」のほうがずっと人気があるわけだが。さらに漢方医学には「八脈」という言い方もある。

現代の中国では，市場経済の導入による市民社会の発展に伴い，中国人はますます自分の財産

NII-Electronic Library Service

Saga Women's Junior College

に気を配るようになった。「八」という数字は発音において「発」（金持ちになる意味）と同じであるため，現代の中国人はますます「八」という数字を好むようになった。いずれにしても，中国の数字文化と日本の数字文化の共通点は「八」という数字に表れている思われる。

終わりに

本稿では，中日両国でよく使われることわざと慣用句を中心に両国の数字文化の特徴について考えてみた。それをまとめると，日本では「三」「五」「七」といった数に代表される奇数をめでたい数字として捉え，たとえば祝儀や葬儀で金額を考える際にはこの数字文化が反映される。もちろん，「四」「九」といった災いに転ずる掛詞的数字は，場所や場面によって避けられる。

中国では，偶数は基本的に幸福を招来するあるいは幸福のシンボルと考える傾向にあるが，奇数の「九」も神聖のシンボルとして好むことは述べたとおりである。

そして中日両国の数字文化の共通点としては「八」がある。現代の中国人が「八」を好む理由は先に述べたように「八」「発」の同音からくる「発財」であるが，そもそもは伝統的に中国人はこの数字を縁起物として偏愛していた。と同じように日本でも「八」については，その字が備える末広がりの字形のために，家庭や商売において将来的に繁盛・繁栄していくというやはり縁起物として多用されてきたのである。日本の富士山が日本の象徴として語られるのも，また年末年始の参拝の対象となって何万もの人々が富士山を訪れるのも，その姿が末広がりの「八」を連想させる縁起物であるからにほかならない。

参　考　文　献

金田一京助他編『新明解国語辞典』三省堂出版社，1999
宮腰賢編『現代に生きる故事諺辞典』文社，1978
池田弥三郎編『言葉の中の暮らし』河出文庫，1986
新村出編『広辞苑』岩波書店，1993
伊東俊太郎編『日本人の自然観』河出書房新社，1995
顔毓陣他編『万条成語大辞典』黒龍江人民出版社，1991
周平等編『日本風情録』東方出版社，1989
叶舒窖編『中国古代神秘数字』中国社会科学文献出版社，1999
劉桂敏編『大学日本語閲読一』南開出版社，2001
劉桂敏編『大学日本語閲読二』南開出版社，2001
荒井敏光編『故事俗信ことわざ大辞典』　尚学図書　1982

注

(1)　金田一京助他編『新明解国語辞典』三省堂出版社，1999

(2)　東方出版社，1989

(3)　「三分七分の兼合い」，「三分は匠，七分は主人」，「三学の友に交わらず，何ぞ七覚の林に遊ばん」，「洋服三分

NII-Electronic Library Service

Saga Women's Junior College

に髭七分」,「七年の病に三年の艾を求む」(荒井敏光著『故事俗信ことわざ大辞典』尚学図書，昭和五十七年)

(4) 宮腰賢編『現代に生きる故事諺辞典』文社，1978

(5) 資料1　日本のことわざ・故事成語に占める名数の割合

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
18.7%	8%	39%	2.9%	5.6%	3.8%	6.5%	10%	1.7%	3.8%

大後美保著『新説諺辞典』東京堂出版，昭和三十四年

資料2

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
19.1%	2.3%	41.3%	0.8%	8.5%	5.3%	8.7%	10.6%	2.1%	1.3%

荒井敏光著『故事俗信ことわざ大辞典』尚学図書，昭和五十七年

(6) 池田弥三郎，河出文庫，1986

NII-Electronic Library Service